



湧き出でよ人材

創立100周年記念碑より

「挑む」
今月のテーマ

本部町立伊豆味小中学校
No.9(両面) 学校だより
R8.7.15 発行

文責 校長 伊波 勉

本部町少年の主張大会



「令和8年度 本部町少年の主張大会」に本校から中学3年生の嶺井徠亜さんと、中学1年生の豊里柚杏さんの2名が代表として出場しました。会場となった町文化交流センターには多くの聴衆が集まり、緊張感のある雰囲気の中での発表となりました。二人とも「緊張しています」と話していましたが、その様子を感じさせないほど落ち着いた態度で、これまでの練習の成果を十分に発揮し、自分の考えを堂々と主張していました。

惜しくも代表には選出されませんでした。二人の主張は内容が充実しており、発表態度も大変立派でした。発表後には、会場から大きな拍手が送られ、その健闘を称える温かい雰囲気に包まれました。

最高の達成感

伊豆味中学校 一年 豊里 柚杏

「めんどくさそう」と友人が言っていました。それを聞いた私は、こう思いました。きつと走ることがきつくて疲れるから走りたくないのだから。と。その友人の気持ちと私も以前までは一緒でした。

小学生の頃、駅伝をしている先輩達を見て、きつい中でもチームの仲間と声を掛け合いながら、最後まで諦めずに頑張る姿がかっこよくて「私もその一員になりたい」と強く思っていました。

いざ駅伝部の活動が近づくと、あの日の憧れとめんどくさい気持ちと不安が入り交じっていました。「本当に苦しくなったときにはやめてしまいたい」と甘い考えが常に頭の片隅に見え隠れしていました。

いよいよ駅伝部が始動し、初めての練習でのウォーミングアップ。その時は、きつい気持ちはなく楽しい気持ちで走り出すことができました。しかし、練習はだんだんきつくなってきました。回数を重ねるごとに、「今日の練習はまだ楽なほうだ。また明日はもっときつくなつて、そして明後日はもっときつくなつて。私に走れるのかな。」と絶望の中、やめたい気持ちの方が大きくなっていききました。今でも十分きつい練習をしているのにもっときつい練習になったら皆に追いついて走れないかもしれない。というできない自分がばれることが恥ずかしいという気持ちもありました。そう思っていた自分は弱音を吐いてしまいました。でも、仲間が、「きつと行けるよー！みんな諦めずに最後まで一緒に頑張ろうよ。」

と声をかけてくれました。この言葉で少し前を向く事ができましたが、弱音を吐くことは止められませんでした。すると、周りのみんなにも連鎖し、チームの雰囲気が悪くなりました。その時、キャプテンの一言で勇気づけられました。

「諦めないで最後まで頑張ろうよ。」
と。私はその言葉を聞いて、「確かに。ここで諦めたら試合終了だ。ここで弱音を吐いてしまったら雰囲気も悪くなるし、自分の心にも負けてしまうから諦めないで最後まで頑張ろう。」そう思いました。弱い自分に向き合っていました。みんなに追いつくために最後まで走り、追いつけなくても諦めませんでした。ゴールすると、嬉しい気持ちでした。

何度か弱い自分に負けていたけど、キャプテンの言葉を信じて頑張ったから、走りきったあとの達成感がありました。それは、私の人生にとって大きな出来事でした。もし、あの時弱い自分と向き合っていなかったら今の自分は居なかったと思います。それは自分だけではありませんでした。チームの皆もあの時に諦めていたら、みんなでゴールできませんでした。

この経験から、違う場面でも考えてみると、色々な場面でも、達成感を感じるように行動してみるとうまくいくのではないかと思います。

日頃の授業のときには、苦手な課題が出てきたら、「こんなの絶対に自分じゃできない。」と思って、投げ出すことがあります。でも、みんなで聞き合いながらできないと決めつけていた課題にも諦めずに向き合っていると、解けた達成感がありました。これも、駅伝と同じでみんなが協力して諦めずに向き合うことが大事だということなのです。もしその時にやめていたら、達成感を感じる方を選ばなければ、その時の授業中は楽かもしれないけれど、それは一瞬で、テストや次にレベルアップした問題を解くときに苦しい時間になるのです。

「めんどくさそう」と友人の声が聞こえてきたら、自信を持ってこう答えます。

「仲間と一緒に諦めずに頑張れば、きつくてでも楽しくなる。」

と。あの日のキャプテンの私を変えてくれた言葉のように。今度は自分も、自分に向き合えたように、仲間にも向き合って一緒に最高の達成感を味わえるようになりたいです。弱い自分にも、頑張る自分にもどんな自分にも向き合って、諦めずに最高の達成感に向かって走り続けて、今日もチームの仲間と頑張ります。

僕の家族

伊豆味中学校三年 嶺井 徠亜

僕には家族がない。そんな言葉を聞くと、みなさんは何を思いますか。

家族というものは自分にとってどのような存在なのでしょう。一緒に住んでいる人なのか、「血のつながっている人」なのか、「家族だと思ふ人」が家族なのでしょう。僕にはそれがわかりません。

僕の家族構成は、母、亡くなった祖父、祖母、僕の四人です。七歳までお世話になった、一つ目の家族です。八歳からは、母、祖母、長男、次男、三男、僕の六人家族になりました。僕にとっての二つ目の家族です。こんな風に僕には二つの家族があります。「家族」という言葉の意味を調べてみると、「夫婦や親子などの血縁・婚姻関係を基礎にし、愛情や信頼といった情緒的な絆で結ばれた共同生活の最小単位」と知り、僕には「絆」がある家族がないのではないかと暗い気持ちになりました。

僕が家族について考えるきっかけになったのは、「家族構成は？」

と聞かれた時でした。ためらうことなく答えられると思っていた質問でしたが、その時は黙り込んでしまいました。周りのみんなとは違う自分の家族構成。僕の中でどうかが家族なのだろうと疑問を抱き、次に、僕には家族がいるのだろうかと思ひ、寂しい気持ちになりました。

言葉の意味や周りと比べて悩みましたが、二つ目の家族が僕にとっての家族だと思いたいと考えました。その理由は、今一番そばにいて、一緒に住んでいるからです。では、一つ目の家族は家族ではないのでしょうか。

一つ目の家族との思い出は、祖父と釣りに行ったこと、祖母とテレビを見たことです。考えてみ

てみても深い温かい思い出は少なく、母の印象は、「いい人で変な人」でした。幼稚園の送り迎え、一緒に買った買物の良い思い出ばかりではありません。

隣にずっと一緒にいてほしかった母親はいつも隣にいませんでした。とても悲しくて寂しくて、怖い思いをした幼少期の思い出ばかりが思い出されます。休みの日にはあまり家にいなかった母親の代わりに祖父や祖母と過ごす時間が多かったです。周りのみんながあたりまえのようにしている、家族みんなと一緒に食べるご飯の回数も少なかつたような気がします。こう考えると、嫌な気持ちになるばかりの一つ目の家族は、家族なのだろうかと思ひます。

次に二つ目の家族にはたくさんの温かい思い出があります。兄たちと一緒に遊び、みんなで一緒にご飯を食べる楽しい思い出です。その中でも特に、バーベキューをしたり花火をしたりして遠出をする思い出は僕にとっての憧れでもあったので、いつ思い出しても幸せな気持ちになります。大学生になった兄たちは、離れても、僕に楽しい思い出をくれる存在です。それは母も祖母もおなじようにそうしてくれます。そのおかげで毎日が楽しく過ごしています。

この二つの思い出を振り返ってみると、僕に愛情を注いでくれて、信頼ができて、絆がある家族は二つ目の家族だと思いました。

それでは、一つ目の家族の存在は、愛情や信頼や絆がないので、必要が無い存在だったのでしょうか。

それは違います。この二つの家族の愛情や絆は、中身は違うけど、同じくらいあると考えました。一つ目の家族と過ごした、寂しきが多い思い出は、二つ目の家族を愛おしく思える自分に、辛くても乗り越える強い自分になってくれました。そして何より生んでくれて、大切に育ててくれて

感謝している家族です。もしかしたら、僕を強くしてくれたことや、今頑張る源になっていることが、絆なのかもしれない。

今は、僕には二つの家族があつて誇らしく思っています。なぜなら、今までに経験したことのない辛さや、悲しさ、苦しき、これから出会ったときも、これまでの経験を乗り越えた僕がいるから、忍耐強く我慢もできるようななっていくと思うからです。

みんなとはちがう僕の家族だけど、愛情や絆が二倍ある自分に自信を持って、頑張っていきたいです。二つの家族を大切にしながら、この恩を返せるように。この恩を返し終わったら次は僕がサポートできるような存在になりたいです。これが僕の大切な家族です。